

Title	日本語教科書におけるカモシレナイ
Author(s)	川口, さち子
Citation	聖学院大学論叢,17(3) : 37-48
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=120
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

日本語教科書におけるカモシレナイ

「文脈」と「機能」による教材分析

川 口 さち子

Kamoshirenai in Textbooks of Japanese as a Second Language
A Textbook Analysis through “Context” and “Function”

Sachiko KAWAGUCHI

In her latest study of *kamoshirenai* modality form, the author of this paper claims that the communicative functions of the word in a specific context should be neither confused with nor interpreted as derived versions of its basic meaning, “manifestation of possibility”. With the description of a specific context under which a specific function of *kamoshirenai* is required to appear, the author analyzes example sentences and oral communication practices using *kamoshirenai* and tries to find out what are wrong or good with them when they are offered as aids for acquisition of the word. The analysis reveals that the description of the context turned out to be an effective tool for examination of good textbooks and teaching materials. It also tells us that only a few of the communicative functions of *kamoshirenai* are taught in elementary through advanced textbooks of Japanese as a second language with others either just ignored or dealt with only indirectly.

0. はじめに

筆者は、本誌15巻2号掲載の論文(川口(さ)・2003)において、日本語のモダリティ形式の一つであるカモシレナイを取り上げ、その意味と用法を論じた。その議論は、先行研究を批判的にレビューしつつ、カモシレナイの「基本的意味」を「ある程度の可能性があるということを明示すること」と捉え、従来その派生的な意味や用法として論じられてきた「間接性」や「婉曲さ」という概念が実はそのことばの意味そのものではなく、そのことばが使われている「文脈の要請により生じた、場面ごとの個別のコミュニケーション上の役割」、すなわち、「機能(communicative function)」であるとするものであった。

特定の言語形式の「意味」と「文脈」と「機能」に関する、筆者のこのような考えによると、現

Key words; *kamoshirenai*, textbooks of Japanese as a second language, expression-oriented instruction, communicative function

在，第二言語としての日本語（以下，「日本語」と略称）教育において使用されている初級から上級までの教科書・教材の多くを統一的に分析することが可能になる。そのような分析の結果，カモシレナイに関する文法記述・生成練習のための例文の提出法や問題の作り方については，「文脈」の意識が欠如している場合は，学習者が既習事項を身につけて自律的に表現できるようにさせることについて，著しい不都合を生じる恐れがあることが見えてくる。本論では，「文脈」と「機能」を操作概念として，既存の日本語教科書・教材⁽¹⁾におけるカモシレナイの文法解説・例文・練習問題などを批判的に分析し，その問題点の所在を明らかにする。

1. 先行研究

これまで，日本語教育におけるカモシレナイの扱いについて述べたものはほとんどない。日本語教育関係の学術専門誌に発表された先行研究として挙げられるものは，杉村（2001）と平田（2001）の2篇のみであるが，前者は，カモシレナイと～ニチガイナイとの対立を，蓋然性の高低ではなく，後者がモダリティ表現なのに対して前者は命題表現である⁽²⁾という，表現そのものの性格の違いとして論じている興味深い内容ではあるものの，日本語教育におけるこれらの文末表現形式の扱いについては一言も触れていない。

一方，後者には，日本語教育におけるカモシレナイの扱い方の現状に対して批判的な議論を展開し，よりよい指導の仕方について提言を行っている。平田（2001；66）では，まず日本語教科書におけるカモシレナイの取り扱いの全般的な傾向について，カモシレナイが初級で提出されたあとは顧みられなくなるという傾向のあることを述べているのだが，その初級での練習についても次のように批判している。

学習者は，表現形式が表す意味を理解し，多くの場合，接続の練習をするが実際の対話において「カモシレナイ」がどのような機能を持つか，どのような使い方ができるのかを学ぶことは極めて少ない。そのため，「カモシレナイ」を同じ初級レベルで提出される「デショウ/ダロウ」と似たような意味を表す，より確からしさの低さを表す表現形式だという認識を持つ学習者が多いようである。（p.66）

ここで「接続の練習」と言われているものは，カモシレナイに前接する文の文末の述語を形態変化させる練習である。例えば，「分かりませんでした」という内容の文にカモシレナイが接続する時は，「分らなかつたかもしれません」というように述語部分が変化することを確認させるための練習であり，形態論レベルの文法練習である。これだけの練習に終始しては，そしてそういう練習問題が初級日本語教科書には多いゆえに，学習者は，カモシレナイがダロウより確かさの低い推

量表現であるという程度の理解しか得られないまま中級に進んでいく。もしこれで、さらに別の練習を与えなければ、例えば「確かにそうかもしれませんが」と前置きして反論を展開するというような、談話レベルにおけるカモシレナイの用法は身につかないであろう。平田は、具体的な教材分析はしていないが、中級レベルでもカモシレナイの用法に関して十分な練習が行われていない現状を暗示して、次のように結論をしめくくっている。

日本語学習者にとって、学習した表現がどのように使われるかを知ることが、自分が使えるようになるための必須条件であると言える。そのために、特に中級レベルにおいて、的確な文脈における使用例を提出することがもっとも重要であろう。(後略)(p.66)

平田(2001)のこのような議論は、現存の日本語教材におけるモダリティ表現の指導方法に疑問を持つ日本語教師ならば、おおむね賛同できるものである。しかし、この論文では、5種の教科書・教師用指導参考書⁽³⁾の、カモシレナイについての意味的な説明を引用しているだけで、具体的な練習問題などのどこが問題かについて分析しておらず、また中級レベルでの表現練習が重要であると言いながら、中級教材については一切分析していないなど、教材批判の論述が説得力に欠けるところがある。さらにまた、平田が中級で指導されるべきであるとする、カモシレナイの「語用論的用法」というのは、平田の、この論文の中心的な論点であるのだが、川口(さ)(2003)で詳細に検討したとおり、議論がトートロジーに陥っているところがあったり、用法の名称がその実態にふさわしくなかったりするなど、教科書分析のための操作概念としては少々問題を含んでいる。平田自身、カモシレナイの意味を「推し量り」と、そこからの派生義の「婉曲」に分け、さらに、「婉曲」を「間接的表現」、「前置き」、「擬似的同意」に分類するなど細かい議論をしているにもかかわらず、教科書分析の部分になると、これらの意味・用法を分析のための操作概念として使っていない。事実、平田がよりよい日本語教育のために提案していることは、「婉曲」に表現することが聞き手の「積極的フェイス(positive face)」または「消極的フェイス(negative face)」⁽⁴⁾を威嚇せず、それらを維持するためのポライトネスとしての役割を果たしているという分析に基づく、以下の記述のみである。

その際[中級レベルにおいてカモシレナイの的確な用例を提出する際 筆者注]、発話行為において話し手の聞き手に対するポライトネスとして「カモシレナイ」が機能し、それが同時に、話し手自身の自己防衛を兼ねることを解明していかなければならない。(p.66)

筆者は、以上示したような、平田(2001)におけるカモシレナイの意味・用法の分析では、初級から中級にいたる日本語教材のカモシレナイの扱いについて、個々の解説・練習・例文を統一的に、

具体的に分析するための根拠が得られないと考える。そこで、次節では、川口(さ)(2003)で筆者が提唱した、カモシレナイの「意味」と「機能」の関係を再提示し、それを操作概念として「教科書におけるカモシレナイ」を分析し、それが教科書分析のための有効な議論の根拠となりうることを論ずる。

2. カモシレナイの「意味」と「機能」

モダリティ形式としてのカモシレナイの先行研究は、現在のところ、その意味の記述が「相対的に蓋然性が低い」ということから「命題が真である可能性が、低いながらも存在するところに着目する」ということへ、すなわち「蓋然性の低さ」ではなく「可能性の存在」に注目する方向に変わってきている。その流れの中で、その語用論的な働きとしての「婉曲」用法とそれが働くメカニズムが論じられるようになってきている。本論の筆者は、川口(さ)(2003)で論じたように、これらの先行研究を踏まえながら、カモシレナイの基本的意味を「(可能性の肯定については言及せず)ある程度の可能性があるということを明示すること」⁽⁵⁾(以下、「可能性明示」と略称)であるととらえる。しかし、実際の用法においては、例えば平田(2001)で「擬似的同意」と命名されたような用法、つまり反論する前に「確かにおっしゃるとおり...かもしれませんが」と前置きするような使い方が存在し、これが「ある程度の可能性があるということを明示する」という意味からどのように導き出されるのかは、別途説明しなければならない。筆者は、この「擬似的同意」のような働きは、カモシレナイの直接の、あるいは派生的な「意味」であるとは考えない。このような働きは、特定の文脈が「擬似的同意」の表現を必要とするとき、「可能性の明示」を意味に持つカモシレナイがその役目を負わせるにふさわしいものとして選ばれて、その文脈によって発動するものである。つまり、相手の意見に対して反論が必要な場合、「そんなことはない」のように相手の発言を直接否定する言い方をすると、攻撃的な議論になり、相手の反発をかう恐れがある。そこで、反論する人物には相手にとってその反論が受け入れられやすいような表現をすることが要請される。その際、相手の発言内容に「可能性明示」のカモシレナイをつけて引用すると、その内容が真であることに「ある程度の可能性があるということを明示する」ことになり、相手に発言内容を全面否定したという印象を持たせずに議論をすることができるのである。

カモシレナイが「擬似的同意」表現へ利用されるときに見せるこのような働きを、筆者は「コミュニケーション機能(以下、「機能」と略称)」と呼ぶ。筆者の考えでは、「擬似的同意」は、平田(2001)の言うように、カモシレナイの「派生的意味「婉曲」の三つの用法のうちの一つ」などではなく、文脈がカモシレナイに要請した「機能」なのである。したがって、それはカモシレナイというモダリティ形式に固有なものではなく、「反論が必要な文脈」に依拠した働きである。事実、同じ「擬似的同意」を、「確かにおっしゃるとおり...」である。しかし、「...」とカモシレナイを使うこ

となく表現することは十分に可能である。「断定」のモダリティ表現でも担える「擬似的同意」という「機能」を、カモシレナイの「意味」や「用法」と考えなければいけない理由は特に見出せないと言わざるを得ない。

このように、カモシレナイの「可能性明示」という意味は、さまざまな文脈によって、その文脈に固有の「機能」を発動することに利用される。カモシレナイの意味・用法と考えられているものとは、実は「機能」なのではないかと再考してみる必要がある。しかし、その前にこの一つ一つの「機能」を生み出す「文脈」とは何なのかを、論じておこう。

3. 「文脈」と「機能」

本論の筆者は、「文脈」の定義、より正確には「文脈」を記述することの定義を、川口（義）（2000；27）にしたがって、「特定の語彙・文法項目を含む文や文章が「どういう文脈で」、つまり「だれがだれにむけて」「どういう目的をもって」発信されるのかを記述すること」と考えたい。このように定義すれば、前述の「擬似的同意」にカモシレナイが使われる「文脈」は、次のように定義できる。

「談話の参加者の一人が」「その直接の相手に向かって」「相手とは良好な人間関係を維持することを意図して、その相手の発言に対して穏便に反論する」という文脈（より正確には、「相手の発言内容を否定したり無視したりする態度をとる攻撃的な方法も、全面的に認めておいて結局は反駁するという「不意打ちを食わせる」ような方法もとらずに反論する」という文脈）

この個別文脈の下で、カモシレナイの意味「可能性明示」は、次のように利用される。

反論の表現者が、「相手の発言内容が真である可能性がある」ということを明示する（すなわち、そういう認識であるという態度を表明する）

その結果、次のような、「擬似的同意」とでも呼びうるような「機能」をもってコミュニケーションを展開できるのである。

相手とはなるべく穏健な関係を維持しつつも、続く部分が反論であることを予想させ、展開の見えやすい議論を行う

このようにカモシレナイの使われるすべての状況は、上述の のように定義した「文脈」の中で、

に示したような「基本的意味」の個別文脈への当てはめが行われ、その結果当該の文脈においてカモシレナイに要請されたような「機能」が生まれる、というように「文脈」と「機能」との関係で統一的に説明できるのである。

平田(2001;66)で指摘されたように、学習者が既習の句型・文法を使えるようになるために「的確な使用例を提出することが重要」だとすれば、ここで記述してみせたような「文脈」と「機能」の概念は、日本語教科書・教材におけるカモシレナイの解説・例文・練習が「的確な使用例」として提出されているかどうか判断するとき有効な操作概念として使用できる。そこで、次節では、「文脈」と「機能」の概念を使って、具体的な教科書・教材分析を展開する。対象とすべき教科書・教材は各種あるが、初級から上級までを概観したいのと紙幅の制限から、それぞれのレベルで1種類のを挙げるにとどめる。

4. 初級教科書におけるカモシレナイ

まず、日本語初級教科書におけるカモシレナイの扱いを検討する。

1. 『みんなの日本語 初級』

典型的な初級総合教科書で、広く使われているこの教科書では、カモシレナイが第32課(全50課)に登場する。「句型」の3番目が「約束の時間に間に合わないかもしれません」とカモシレナイの例であるが、短文であるために「文脈」の記述ができない。続く「例文」では、5と6にカモシレナイが含まれている。

5 先生、ハンスは何の病気でしょうか。

...インフルエンザですね。3日ほど高い熱が続くかもしれませんが、心配しないでください。

6 エンジンの音がおかしいと思いませんか、

...ええ、故障かもしれません。すぐ空港に戻りましょう。

例文5の「文脈」記述をしてみると、「医師が」「患者の友人が親族らしき人物に向かって」「相手の質問に答えて、診断結果と専門家としての所見を知らせるために」話している会話である。病状に関する説明であるため、患者側の危機管理を促す目的で「3日ほど高い熱が続く可能性がある」ことを明示するのは当然である。例文6は、「車に異常を感じた乗員が」「同じく異常を報告してくれた友人に向かって」「その友人の意見は聞くべきところがあるとの認識を示し、続く「誘い」表現を受け入れやすくするために」カモシレナイを使っている。緊急事態を共有しているという表現意図を表現するために、相手の「異常なエンジン音=車の故障の可能性」という認識を共有していることを積極的に示す必要があり、そのためにカモシレナイの「可能性明示」が要請されている。こ

のように、カモシレナイは、「可能性の明示」を行うことによって、文脈上必要になってくる相手への働きかけ（例文5では「忠告・助言」、例文6では「誘い」）を受け入れやすくする「機能」を有する。続く、本文「会話」でも、体調の不良を訴える同僚に「それは、いけませんね。病気かもしれませんから、一度病院で診てもらったほうがいいですよ」と「忠告・助言」する例が載っており、同趣旨の「機能」を示す例である。『みんなの日本語 初級』第32課のカモシレナイは、ここまでのところでは適切な使用例を提出している。ただ、カモシレナイによって「前置き」を付けられた後続の働きかけ表現は、専門家のアドバイスだったり、危機管理上の統一行動への同意だったり、学習者が表現するには特殊なものではないかと疑われる。本文の、同僚への同情とアドバイスは、まだ身近な状況であるが、このあたりの「機能」をどのように練習させるかが次の注目点となろう。

そこで、練習問題に目を転じると、「練習B」の6と「練習C」の3がカモシレナイを含む生成練習である。「練習B」は、次の例で分かるようにキューを与えての変形練習である。

例：電話をかけるんですか。（約束の時間に間に合いません）

ええ、約束の時間に間に合わないかもしれませんから。

まず、この例であるが、唐突に「電話をかけるんですか」という発話が行なわれているが、どんな状況下でこの発話が行なわれているのか、分からない。したがって、学習者は、なぜ「ええ、約束の時間に間に合いませんから」でも「ええ、約束の時間に間に合わないでしょうから」でもなく、カモシレナイが用いられるのか、カモシレナイ利用の「文脈」からの要請は何なのかが不明のまま練習を続けることになる。これは、表現の練習としては、不都合である。その事情は、問題1)～4)でも同様である。また、「練習B」では、相手に働きかける表現を受け入れやすくする「前置き」としてのカモシレナイの使用練習はなく、「例文」「本文」とのつながりが見えない。

会話型の代入練習である「練習C」の3は、どうだろうか。以下がもとの会話である。

A：何か心配なことがあるんですか。

B：ええ、もしかしたら3月に卒業できないかもしれません。

A：どうしてですか？

B：フランス語の試験が悪かったんです。

A：それは、いけませんね。

この会話例では、「友人に心配してもらった人が」「その友人に向かって」「その友人の心遣いに応えるために、心配事で起こる可能性があることについて語る」という「文脈」が見えている。全

体が友人に同情を受けている会話なので、参加者双方が特定の個人との人間関係を良好に保ちたいか、あるいは新しく関係を築きたいという意図のもとに、会話しているのなら、立派な会話として成立つ。ただし、「何か心配なことでも」と呼びかけて正直に答えてくれる相手は限られており、よく知らない相手にこのような会話を始めるのはむずかしい。また、一度この会話に入ったら、相手の心配事に対してしっかりと責任あるケアをしなければかえって失礼になり、その点でも初級の会話練習としてふさわしいものかどうか疑問が残る。すなわち、「心配なことがあるんですか」という「相手への働きかけ」が、「カモシレナイ」利用のための十分な「文脈」記述になっていないということである。特に、「練習C」の問題1)は、代入のキューが「いっしょに旅行に行けないかもしれません」と「パスポートをなくしてしまいました」なので、このような状況で「それはいけませんね」という発話で終わるのでは、相手をなぐさみものに行っているとわかってもしかたがなからう。また、この練習でも「例文」「会話」で出てきた、「相手への働きかけへの前置き」の練習はなされていない。せっかく、比較的身近な状況の表現例が提示されているのに、二つある練習のどちらにもその表現練習が取り上げられていないのでは、学習者に表現が使えるようになることを期待できないのではないだろうか。

5. 中級教科書におけるカモシレナイ

続いて、中級教科書におけるカモシレナイの扱いを見てみよう。

2. 『文化中級日本語』

コミュニケーション的な内容でカラーイラストも豊富な、中級レベルとしては異色のこの教科書で、カモシレナイは第8課(全8課)の文型<2>で提示されている。代表例文として挙げられている「確かにそうかもしれませんね」は、「本文8-1」の「対談」で使われているのを引いてきたものである。この本文は、日本人大学生と留学生の対談の形を取っており、カモシレナイが2回登場する。始めは、「日本人学生は遊びすぎ」と評する留学生の発言に対し、日本人学生が「確かにそうかもしれませんね」とこれを肯定して受け取り、なぜ大学に入ると遊んでしまうかについて説明している。もう一つは「遊んでいてはもったいない」という留学生の意見に「ううん、そういう考えもあるかもしれませんが」と反論に入る前の「擬似的同意」にカモシレナイを使っている例である。「可能性明示」をすることによって、前者は「全面賛成ではないが、その意見が真である可能性はある」ということを表明して相手の議論を受け入れ、後者は「その意見が真である可能性は否定しないものの」という態度で反論に出るといって、一見反対の「機能」を生かして議論をうまく展開している。

一方、「文型」のほうの例文は、次のように二つのグループに分けられている。

可能性があることを表す

1. 雨が降るかもしれないから、傘を持って行こう。
2. A: 今度の日曜日に映画を見に行くんですよ。
B: そうですか。でも日曜日は人が多いかもしれませんよ。
「可能性があること」の形で、意見や感想を述べる
3. A: 日本人は、一日のほとんどを会社で過ごしているような気がします。
B: 確かに日本のサラリーマンは、働きすぎかもしれませんね。
4. A: 外国語を勉強するためには、その言葉が話されている国へ行くのがいちばんいい方法ですね。
B: そういう考え方もあるかもしれませんが、私はそうとも言えないような気がするんです。
5. 人間にとって生活が便利になりすぎるのは、よくないことかもしれない。

この二つのグループ分けの名称は、ちょうど本論の「意味」と「機能」に相当するが、「可能性があることを表す」のグループも、実際にやっていることは、例文1が「誘い」の、例文2が意見を言うように見せかけての、「日曜は行かないほうが」という「忠告・助言」で、どちらも『みんなの日本語 初級』第32課の「例文」「会話」と同じ「機能」を負っていることが分かる。したがって、「可能性があることを表す」という名称も「可能性があること」の形で、相手への働きかけ表現を受け入れやすくする」というように改めたほうがよいであろう。ともあれ、このように「機能」がしっかりと見える形で例文を提出するのは、学習者の理解のためには、歓迎すべきことである。

ただし、この教科書では、このように明示的に提出されている「機能」のうち、生成練習に入っているのは、「擬似的同意」だけである⁽⁶⁾。その練習は、第8課の「意見や感想を述べる」表現練習bで、人物Aの意見に、Bが「そうですね。そういう意見もあるかもしれませんが、私は...なんじゃないかと思います」と「...」の部分にキューを入れる代入練習になっている。カモシレナイのいくつかある「機能」の中のこれだけの練習なのだが、表現意図の明確な練習であるため、学習者には身につけやすいと思われる。

6. 上級教材におけるカモシレナイ

最後に、上級を見ておこう。こちらは、総合教科書ではなく、文法演習のための教材である。

3. 『日本語文法演習 話し手の気持ちを表す表現 モダリティ・終助詞』

最近出版されたこの教材は、上級学習者向けの、文法解説書+練習帳である。副題のとおり、本

書内部は「 . モダリティ」「 . 終助詞」の2部構成で、カモシレナイは「 . モダリティ」の「3. 想像して述べる」の中に「(3)「かもしれない」「恐れがある」「かねない」という組み合わせで出ており、この三つが相互に交換できるかどうか練習になっている。例文は、すべて短文で「文脈」が特定できないため、例えば「恐れがある」「かねない」と交換できる「悪い可能性」のカモシレナイの使用例の「機能」分析ができないのが残念である。実は、上級まで来れば、『みんなの日本語 初級』第32課の「練習C」で見たような、「友人の心配事を聞きだして励ます」というような高度な待遇意識を必要とする練習もできるはずだが、そのような「機能」の生成練習を掲げている教科書・教材は、今回の調査ではみあたらなかった⁽⁷⁾。

本章の最後に第4章以降の分析の結果をまとめてみると、次のようになりそう。

まず、初級・中級・上級のどのレベルの教科書・教材を対象にしても、筆者の提唱する「文脈」から見た表現の「機能」の分析は一貫した視点から有効な分析ができることが示せたと思う。また、カモシレナイの「機能」として意識的に練習の対象になっているのは平田(2001)で「擬似的同意」と名づけられたもので、それ以外の「働きかける表現の前置き」や「個人的な関心事の表明を通じての人間関係の良好な維持」などの「機能」は、意識されている練習も見かけるものの、明確な位置づけを受けているものはなく、それらをどのように教育するか、あるいはほしくないのかということが今後検討されなければならないであろう。

7. まとめと課題

本論では、第1章で日本語教科書におけるカモシレナイの扱いについての、唯一の先行研究である平田(2001)を紹介し、その教科書分析が、有効な分析のための操作概念を持たないため説得力を欠く内容でしか展開できていないことを指摘した。第2章では、川口(さ)(2003)からカモシレナイの「意味」と「機能」に関する部分をレビューし、この二つの概念の混同を戒める議論を行った。すなわち、カモシレナイの「意味」は「可能性明示」に限定すべきで、その他の「派生的意味」や「用法」と呼ばれているものは、すべて特定の文脈においてカモシレナイの「意味」に依拠して発動される「機能」であることを論じた。続く第3章では、「意味」と「機能」を関係付ける「文脈」の概念を導入し、カモシレナイを使用した特定の表現は、すべて「文脈」と「機能」の記述によって統一的に説明できることを示した。第4章～6章では、市販の日本語教科書・教材の中から初級・中級・上級各レベルに属するものを1冊ずつ取り上げ、第3章で紹介した「文脈」の記述により、それらの教科書・教材がカモシレナイをどのように扱っているか、そしてそれぞれの扱いは学習者の習得を助けるようなものかどうか、そうでない場合はなにが問題なのかを具体的に例文や練習問題を分析するなかで指摘していった。その結果、カモシレナイの担いうる「機能」のうち、教科書で意識的に扱われているものは、ほんの一部にすぎないことが判明した。

今回は、筆者の提唱する教科書分析の操作概念の有効性を中心に述べたため、分析の対象にした教科書・教材のすべてを紹介することはできなかったが、いずれ稿を改めてさまざまな教科書・教材におけるカモシレナイの扱われ方を比較・分析し、日本語教育全体でカモシレナイをどのようにとらえ、教育しようとしているのかを明らかにしたい。また、実際の文章や会話の中でカモシレナイがどのような「機能」を託されて使われているのかを、広範囲のデータから探り出すという研究も近いうちに発表したいと思っている。

【参考文献】(著者名のアルファベット順)

- Brown,P. & Levinson,S.(1978,1987)Politeness:Some universals in language usage. Cambridge:Cambridge University Press
- 藤井聖子(2000)「認識のモダリティと”その周辺”との関連 文法化・多義性分析の観点から」,『認識のモダリティとその周辺 日本語・英語・中国語の場合』,pp.52-71,国立国語研究所
- 平田真美(2001)「カモシレナイの意味 モダリティと語用論の接点を探る」,『日本語教育』,108号,pp.60-68,日本語教育学会
- 川口さち子(2003)「カモシレナイの「可能性明示」「意味」「文脈」「機能」の記述」,『聖学院大学論叢』,15巻第2号,pp.69-99,聖学院大学
- 川口義一(1996)「日本語指導の文脈化」,『日本語教育・異文化間コミュニケーション』,pp.69-99,北海道国際交流センター
- (2000)「「ナラ表現」の「文脈化」と「教材化」」,『早稲田大学日本語研究教育センター紀要』,13号,pp.27-49,早稲田大学日本語研究教育センター
- 三宅知広(1995)「カモシレナイとダロウ」,『日本語類義表現の文法(上)』,pp.197-200,くろしお出版
- (1999)「モダリティとポライトネス」,『言語』,Vol.28, No.6, pp.64-69,大修館書店
- 宮崎和人(2002)「認識のモダリティ」,『新日本語文法選書4モダリティ』,p.145,くろしお出版
- 森山卓郎(2000)「モダリティの再整理 認識のモダリティとその周辺」,『認識のモダリティとその周辺 日本語・英語・中国語の場合』,pp.72-85,国立国語研究所
- (2002)「可能性とその周辺 「かねない」「あり得る」「可能性がある」等の迂言的表現と「かもしれない」」,『日本語学』,第21巻2号,pp.17-27,明治書院
- 仁田義雄(2000)「日本語の認識モダリティ」,『認識のモダリティとその周辺 日本語・英語・中国語の場合』,pp.38-51,国立国語研究所
- 野田尚史(1984)「～にちがいない/～かもしれない/～はずだ」,『日本語学』,第3巻10号,pp.47-54,明治書院
- 杉村 泰(2001)「現代日本語における文末表現の主観性 ヨウダ,ソウダ,ベキダ,ツモリダ,カモシレナイ,ニチガイナイを対象に」,『世界の日本語教育』11,pp.209-224,国際交流基金日本語国際センター

【調査対象教材】

- 『みんなの日本語 初級』(1998)スリーエーネットワーク
- 『文化中級日本語』(1994)文化外国語専門学校編,凡人社
- 『新文化初級日本語』(2000)文化外国語専門学校編,凡人社
- 『日本語文法演習 話し手の気持ちを表す表現 モダリティ・終助詞』(2003)スリーエーネットワーク
- 『トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 上級』(2001)スリーエーネットワーク

注

- (1) 本論では、総合教科書を「教科書」、文法解説書・表現練習帳・教師用指導書などをまとめて「教材」と呼ぶことにする。
- (2) 杉村は、カモシレナイがニチガイナイと異なり、連体修飾節になったり、伝聞ソウダの対象になったりできることから、これを「客観的な「カモシレナイ - 」と主観的な「 - 」とからなる」と仮定して、「雨が降るかもしれない空模様」「雨が降るかもしれないそうだ」などの「雨がふるかもしれない」の部分をも題表現であるとしている。
- (3) 引用順に『新日本語の基礎 教師用指導書』(1994・スリーエーネットワーク),『新文化日本語 教師用指導書』(2000・凡人社),『みんなの日本語 文法解説書英語版』(1998・スリーエーネットワーク),『Japanese for Busy People II Revised Edition』(1995・講談社インターナショナル),『Situational Functional Japanese Vol.3 NOTES』(1992・凡人社)の5種である。
- (4) 「積極的フェイス」「消極的フェイス」についての説明は、Brown & Levinson (1978,1987) pp.61-70あるいは平田(2001) pp.63-65参照。
- (5) 実際は、問題の事態が生起する可能性が相当高くても、それがあくまでも可能性であるかぎりその事態が起こらない可能性もあることになる。したがって、可能性が50%以上であってもカモシレナイを使用することは不思議でも不自然でもない。宮崎(2002) p.145にも同様の議論が見える。
- (6) 『文化』の教科書には、『文化初級日本語』もあり、その新版である『新文化初級日本語』(2000)では、「本文2」に「4,5日で治ると思いますが、もう少しかかるかもしれません」という形で「医者 の所見」タイプの表現機能が出ており、この形式を「練習d」で代入練習にしている。学習者が医者のロールになるのが不自然ではあるが、『文化』の教科書では、初級と中級とで異なる「機能」のカモシレナイを練習することができる。
- (7) ただし、討論や発表のための表現として、「擬似的同意」などの「機能」で登場するカモシレナイは、例えば『トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 上級』(2001・スリーエーネットワーク)などの教科書で広く取り上げられるようになってきている。